

「111」ろのケア」で支援

被災者の精神的ケアを専門とする「111のケアチーム」が県内で活動を始めた。国立病院や道府県が精神科医、心理療法士らで独自に編成し、国を通じて派遣される。第一陣の12チームが大船渡市、陸前高田市、宮古市などで、地域の精神医療機能が回復するまでの「つなぎ役」を果たす。23日に宮古入りした国立病院機構琉球病院のチームも避難所を巡り、被災者の話に耳を傾けている。

【安藤いづ子】



村上院長（後列右）を中心に朝食を取りながらその日の活動予定を話し合う。宮古市の宮古地区合同庁舎で

全国の専門チーム 沿岸被災地で活動

琉球チームが拠点にみ、他の復興支援者ら 察を受けられない。避する宮古地区合同庁舎と雑魚寝だ。毎日午前 難後の2週間、不眠を1階ロビー。24日午後 7時半、朝食を取りな 訴える女性の精神状態 7時過ぎ、メモ帳を手 ながら打ち合わせをし、 は不安定だった。村上に心理療法士の野村れ 午前9時に出発する。 院長は「移動手段が確 いかさんが待ち受けて 26日までに市内約60カ 保されるまで投薬を続 いたリーダーの村上優 所の避難所のうち5カ けていく」と、つなぎ 院長(61)に報告した。 所を計11回訪問した。 の役割を説明する。

「気になる子がいま 村上院長は被災者一 村上院長のチームは ず」。避難所で片頭痛 一人に「血圧を測り 2週間で同僚のチーム を訴えていた男子中学 ます」と最初に語りか と交代する。短期間で 生のことだ。村上院長 ける。被災から間もな 被災者と信頼関係を築 は「震災への恐怖、将 い時期に生々しい体験 くことの難しさも合 来への不安が体に表れ を思い起こさせるのは め、ケアチームの活動 ているのかもしれない。 被災だけでは不十分だと感

地域機能回復へ「つなぎ役」

い。明日も行く」と 者が語り始めても、「そ じている。26日朝、合 応じた。片頭痛は治っ うなんだ」と深く聞か 同庁舎ロビーで出発準 たという中学生は翌 ず、受け流すように心 備に忙しいスタッフ 日、吐き気を訴えた。 掛けている。 を見つめながら静か

野村さんは「見守って 中学生が吐き気を訴 に話した。「私たちの いかなければ」と話。 えた25日、市街地から ような外部の医療従事 琉球チームの構成は 遠い別の避難所も回 者が去った後にどうサ 精神科医1人、看護師 た。津波で家と一緒に ポートするのか。地域 3人、精神保健福祉士 常用の精神安定剤を流 の医師不足解消から始 と心理療法士各1人の された女性がいた。無 めなければ、この災害 計6人。合同庁舎内の 事だった車は燃料不足 には太刀打ちできな 会議室に寝袋を持ち込 で使えず、主治医の診 い」